

犬の前立腺疾患

近年、獣医学の進歩に加え飼主の意識の向上もあり、犬の寿命が大幅に延びました。このため雄犬の老齢病として、人と同様に前立腺疾患が注目されています。

はじめに

前立腺は雄犬の精液の重要成分を産生する唯一の副生殖腺です。解剖学的に膀胱の後方に存在し、クルミ状を呈し骨盤腔に位置しています。大きさは犬種により様々ですが、スコティッシュ・テリアは体の割に前立腺が大きい気がします。

犬の前立腺疾患にみられる主な病変には、急性前立腺炎・慢性前立腺炎（膿瘍を伴う場合と伴わない場合がある）・前立腺肥大症（良性前立腺過形成：BPH）・前立腺結石・前立腺の腫瘍があります。最も一般的な病変は、前立腺肥大症（良性前立腺過形成：BPH）・細菌性前立腺炎がほとんどですが、上記病変が併発することがよくあります。性成熟を過ぎても年齢の増加に伴い、少しずつ容積を増していく特徴ある外分泌器官であり、生理的な肥大を超え顕著な場合に臨床症状が現れます。4歳以上の未去勢犬の約60%以上に前立腺障害がみられ、年齢とともに割合も高くなります。

原因

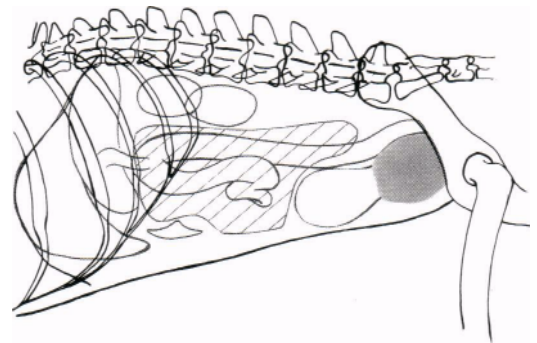
最も多い前立腺肥大症（良性前立腺過形成：BPH）では、ホルモンのアンバランスがあげられます。老齢になるにつれて精巣からのアンドロゲン分泌量は低下していきませんが、逆にエストロゲン分泌量は多少とも増加傾向を示すため血中の性ホルモン濃度のバランスが崩れてしまいます。この結果が、前立腺の腺上皮細胞および間質細胞の異常増殖・過形成の原因と考えられ、腺房の拡張と間質の増加により前立腺の過形成が起こります。

急性の前立腺炎は、尿道からの細菌感染によって起こります。膀胱炎を併発したり、もしくは膀胱炎からの波及により、前立腺炎が起こることもあります。

急性前立腺炎より時間が経過すると、慢性前立腺炎になり、嚢胞内に膿液が貯留すると前立腺膿瘍に陥ります。

臨床症状

前立腺肥大症において、前立腺の真上を走行する直腸が圧迫され、便が細くなったり平らになるなどの排便異常や排便困難がみられます。ヒトほどではないですが、尿道も圧迫されて排尿障害・排尿困難を示すケースも少なくありません。また他の前立腺疾患を併発することも多いことから、その他の臨床症状も認められます。具体的には前立腺炎や前立腺嚢胞の併発がある場合には、排尿とは無関係に血尿に似た血色水様の前立腺分泌液を陰茎の外尿道口から垂らすこともありますし、疼痛のために歩行を嫌ったり、後肢を触られるのを嫌がる犬もいます。前立腺腫瘍の末期では、前立腺周囲のリンパ節、腰・仙椎骨、骨盤骨および大腿骨に転移し後肢歩行不全がみられることもあります。



前立腺が肥大（灰色部）し、膀胱が頭側へ下行結腸が背側に変位する。

検査・診断法

上記の臨床症状をもとにして、以下の検査を実施することにより、種々の前立腺疾患を診断することができます。

直腸検査

直腸内に指を挿入し、前立腺の大きさ、形状、硬さを知ることができます。指で圧迫することにより、疼痛の有無、嚢胞や膿瘍の有無、腫瘍の発生を類推することができます。前立腺疾患を疑う時の最初の検査法です。

X線検査

前立腺の大きさとともに、背側にある直腸を圧迫している様子、造影剤を使えば尿道を圧迫している様子がわかります。

治療過程において、どのくらい薬剤に反応しているのか診るときにも用いる検査法です。

超音波検査

下腹部の包皮にプローブをあて、前立腺の大きさのみならず、尿道の狭窄や嚢胞の形成の有無と大きさなど、病変が合併する前立腺疾患において前立腺の内部構造が観察でき、非常に有効な検査法です。

前立腺バイオプシー

前立腺の組織を採取して、病理組織学的な診断に用います。いろいろな方法がありますが、直腸から長めの針で組織を採取します（傍直腸アプローチ法）。動物が暴れるため、この検査のみ動物を鎮静下で行わなければなりません。

上記の3つの検査を組み合わせ、内科的治療を行い、反応が乏しい時、もしくは前立腺腫瘍を除外する時など、確定診断に用います。

精液検査法

犬の射精精液は三つの分画に分けられます。最初に射精される透明水様な第一分画、精子を含む白濁した第二分画、多量に射精され透明水様な第三分画に分けられます。これらすべての液体成分は前立腺由来であり、特に多量に射精される第三分画液は前立腺の状態をよく反映していることから、この第三分画を検査に用いることで、前立腺の機能や疾患の有無を知ることができます。

しかし、この方法は開業動物病院では一般的ではありません。

治療

原因によって、治療法は大きく異なります。

前立腺肥大症においては、去勢・未去勢によっても異なります。未去勢の場合、去勢（精巣摘出術）が第一治療になります。前立腺はアンドロジェン依存性の器官であるため、精巣を摘出すると前立腺は急速に萎縮します。去勢している犬では抗アンドロジェン作用の強い合成黄体ホルモンである酢酸クロルマジノン（CMA）を経口投与します。近年では、CMAより5倍程強力な前立腺抑制作用を有することが確認されている酢酸オサテロン（OSA）の経口投与が一般的です。

前立腺炎では、適切な抗生物質を長期間（約1ヵ月）経口投与します。一部の症例においては、急性前立腺炎から慢性前立腺に進行し、慢性前立腺炎では再発が起こるため、治療を3ヵ月延長することもあります。

前立腺腫瘍と確定診断された場合、残念ながら有効な治療方法はありません。動物のQOL（Quality of life：生活の質）の向上につとめます。

（文責：中村 智之）